

環境とCSRと「志」のビジネス情報誌

alterna

オルタナ

April
2010

18

187円

環境・CSR経営
世界ベスト

100

オルタナパーソン
ビル・ドレイトン
(アショカ代表)

エネルギー自給率
500%のアイスランド

創刊3周年記念号

オルタナティブな空間

馬場正尊

12

「やおや」という表現



「やおや」、9月学祭にて販売

この人なつっこい屋台は、僕の通う東北芸術工科大学前の道路に毎週出現する。大学生と卒業生によるパフォー

マンスであり、商売。すなわち、「やおや」であり八百屋である。最初は時間的な企画として行われた。しかし駆け出しのアーティストが八百屋をやることで、さまざまなことが顕在化した。

彼らは郊外の農家に「見てくれが悪くてもいいから、おいしい野菜を分けて欲しい」と声をかけてもらった。「面白いやつらがいる」というウワサはウワサを呼び、いつのまにかちよつとした農家ネットワークができあがる。今では米からアイスパラントという塩を吸収して育つ不思議な野菜まで、さまざまなラインナップが揃っている。

彼らは「やおや」を表現としてやっていく。そういう意味では商売ではない。しかし、商売をしようとする中で、今まで顕在化しなかった農業の流通に一石を投じる。現実を描きだすことはアートにとって重要な役割。何より、

その存在感がチャームポイントだ。何をもって表現か、何を持って商売か。何をもって「やおや」で、何をもって八百屋か。その際を覚えて曖昧にしているのがこの作品の問題提起だろう。

今、現代アートの一部は、商業のラインに完全に乗っている。アートマーケットは、株価より世相に敏感な経済市場でもあり、時に投資の対象でもある。それがダイナミズムもあるが、それだけを見ていると、「アートって何？」という壁にも当たる。かといって、閉じた世界だけでしか通用しない独りよがりの表現を、僕は嫌いだ。

「やおや」は、その間を素直に、ささやかに揺れ動いていて、なんだかとても危うい。それが彼らにとつてのリアリティなのではないだろうか。表現の質を保ちながら、いわゆるアートマーケットとは違うマーケットを築けるか。それが問題だ(笑)。

ばば・まさたか 建築家。1968年佐賀県生まれ。94年早稲田大学大学院建築学修士。博報堂・早稲田大学博士課程「雑誌A」編集長を経て、02年Open Aを設立。東北芸術工科大学准教授。Open A <http://www.open-a.co.jp> 東京R不動産 <http://www.realtoyoestate.co.jp>

Insights

Alternative space

Illustration : Shunji Abe

Room to Readers 12

ジョン・ウッドからの手紙

すごい高校生が富山に

僕は、1年のうち250日以上を海外で過ごします。今年も2月から約1ヶ月かけて、メルボルン、シドニー、香港、東京を遠征しました。もちろんバケーションではなく、ファンドレイズのためです。そんな生活をして疲れないのか。私がよく受ける質問のひとつです。

答えは「NO」(きつぱり)。毎日、世界中の誰かに感謝をする生活です。毎朝目が覚めて今日できたばかりの学校や図書館で、子供たちが目を輝かせながら絵本を読んでいると想像し、思わず微笑んでしまいます。

一方で、まだ教育が受けられない子供たちを思うと、いってもたつてもいられなくなります。「君は学校に行けるけど、君はあと3年待って」なんて誰が言えますか。

私たちにできることは、一人ひとりがアクションを起こすこと。それがグローバルムーブメントにつながる。

ントにつながっていくのです。

富山県に住む高校3年生の渡辺慎之介くん(18)は、3月27日(土)、28日(日)に富山市民プラザで大きなイベントを開催しました。内容は、目標1万冊の本を集めて定価の1割で販売し、収益をRoom to Read(RTR)に寄付するというもの。手探り状態でスタートした当初、学校から開催許可が下りず、周りの大人たちからは「できない理由」を並べ立てられたそうです。でも、彼はめげなかったのです。若い彼のアクションは確実に周りを突き動かし、今では地元ヒーローです。

私も常にアクションし続けました。今回、RTRは大きな決断をしました。2020年までに1000万人の子供たちに教育支援することを掲げていたが、この目標を5年前倒しにします。2015年までに達成することを約束します。

(ルーム・トゥ・リード創設者兼会長)



insights column

エコのご意見番 8 木内孝

私がツバルで見た真実

話題の多いツバルを、5日間訪問する機会に恵まれた。

海岸がどれほど浸食されているのか、珊瑚はどの程度死滅しているのか、ゲリラ豪雨の状態などについて知ることを意識しながらの滞在だった。ツバルには自国の新聞がなく、フィジーの新聞が出回っている。そこに載っていたマンガには驚かされた。「雨が降らないと、水がめが干上がってしまうよ」。

事前に訪問したフィジーのズヴァア町にある、欧州からの援助金で運営されている研究機関SOPAC。その中心的研究者アーサー・ウェップさんの話だと、20世紀100年の海面上昇は170cm。その一方で、1984年から2003年までの20年間の主要17島の面積は、海岸線の移動などにより、28%大きく広がっている。

人口1万人弱の内4500人が居住するフォンガフアレ島とに、笑顔、笑顔、みんな明るい。70代前半で子供9人、孫67人というご夫妻。腹這いで算数を勉強している1人の孫。3人とも屈託なくニコニコ顔。英語を話すので話が発展する。

ふんだんにあるバナナ、パイナップル、ココナッツ、ノニ、パンダナス、パンの木、タロ芋。外海ではマグロが獲れて、毎日の食卓を飾る。ストレスとは全く無縁のツバルの人たち。32年前に英国領から独立したが自立に苦労しているの、助けて上げたいという思いを新たにしたい。散乱して自然に戻らない食べかすやペットボトル、空き缶などの大掃除をして、美しい島の再現を助けたい。

きょうち、たかし 三鷹電機勤務を退職の後、NPOを結成。その後、環境・持続性・CSRの提言会社「イースクエア」をピーター・セン氏と設立。11年目に入る。後援・健康・環境の「三ヶ」にて行き続く行動派。



Illustration : Shunji Abe

Insights